

異 国 で 観 る 月

—海を渡る者の詩から—

MOONVIEWING IN A FOREIGN LAND

FROM THE WORKS OF POETS WHO CROSSED THE SEA

葉 英 樹

Through the examples of several fine poems in Chinese written by both Chinese and Japanese poets in the mid-to late-nineteenth century, this presentation considers the questions: how have poets admired the moon on foreign soil? How have they described what they felt?

To these poets, the moon was a mirror reflecting the faces of people in their homeland. Poems written in Chinese about the moon might be regarded as an artistic medium linking the sentiments of people throughout the East Asian world of letters. An abundance of poems in Chinese were produced from the late Edo period to early Meiji period; they merit our attention in that they played an important historical role as expressions in a common, international language. I hope to continue to research them as a precious vein of ore in the history of early modern and modern Japanese literature.

*YEH Ying-shu 南開大学大学院博士課程。その間、東京大学大学院に留学。早稲田大学卒業。
論文に“On the process of introduction of foreign civilization during Edo period compared with Qing dynasty”「実学東漸——明末清初の渡来文化人」など、翻訳にドナルド・キーン「日本人の西洋発見」中国語訳がある。

発表に入る前に、まず、内容に関して若干の説明をさせていただきます。当初、応募する際には、主として、明治元年頃清朝政府による最初の遣米欧使節団一行に加わり、日本に立ち寄った外交官兼通訳の張徳彝と藤原得所という日本人青年との間に交された自作の漢詩を取り挙げて、アジアの国際共通語としての漢詩文が果してきた歴史的な役割を考える予定でしたが、発表原稿を準備、整理する段階になって、まだ十分に煮詰まっていないことに気付きました。例えば、藤原青年の生立ちや当時の人となりを示す材料が手元になく、また、使節団一行を乗せた船が九州から江戸へ向う途中、どうして日本人である藤原青年がそこに居合わせていたのか、彼はどのような人物であったのか、張徳彝とどのようにして出会ったのか、など不明な点も多々あり、現在のところ、解決の糸口をまだ掴んでおりません。そこで、今日は、やむをえず当初の内容を大幅に取り換えた次第であります。何卒ご諒承して頂きたく存じます。

さて、本題に入りたいと思いますが、本日は、中、日両国の漢詩人たちが十九世紀の中頃から後半にかけて、異国の地でどのように月を賞でて、^{なに}何を胸中に思い描いてきたのかを、様々な実例を通して見てゆくことにいたします。これらの詩の中に詠み込まれている世界を眺めながら、海を渡った人々の内面に潜む精神的文化的空間に逍遙してみたいと思います。

一 月を詠む

まず、皆様によく知られている清朝末期の有能な外交官であり、大詩人でもありました黄遵憲の詩からはじめたい。彼は、『日本国志』や『日本雑事詩』などの名著によって、当時及びその後の人々に広く知られ、かつ尊敬されてきた人物であります。

光緒十一年（1885）の秋、サンフランシスコ総領事の任を解かれて蒸汽船で帰国の途についた彼は、中秋の明月を太平洋上で仰ぎみながら、当時の感慨を長篇の漢詩に盛り込みました。いま、その一部分を引用することにします。

.....

風に乗じて竟に大瀛海を渡り	乗風竟渡大瀛海
頭を挙げて只だ故郷の月を見る ^①	挙頭只見故郷月

.....

(黄遵憲「八月十五夜太平洋舟中望月作歌」)

ここで引いた第一句の「大瀛海」とは、太平洋を指しており、「竟に」という表現のなかには、詩人がようやく帰国の途につき、まもなく祖国の土を踏む時の、たかぶる気持が込められています。そして、第二句は、李白の名篇「静かなる夜の思い」（静夜思）からの借用であることは容易に察知できます。「頭を挙げて山月を望み、頭を低れて故郷を思う」で締め括っているあの名文句であります。黄遵憲もこの時、床の上に横たわる深夜になっても寝つかず、静かな夜のもの思いにふけていたのでありましょう。では、彼は一体なにを観、感じていたのでしょうか。その直前の句は

.....

頭を挙げ西のかた雲深き処を指せば	挙頭西指雲深處
下には人家億万の戸有り	下有人家億萬戸
幾家の児女 別離を怨むや	幾家児女怨別離
幾処の樓台 歌舞を作すや	幾處樓台作歌舞
悲歎離合 同じからずと雖も	悲歎離合雖不同
四億萬の衆 同に秋 中す	四億萬衆同秋中
豈に知らんや赤県神州の地	豈知秋県神州地
美洲より以西 日本より東に	美洲以西日本東
独り一客有りて、孤篷を欹つるを	独有一客欹孤篷
此の客 門を出でて今や十載	此客出門今十載
月光 漸ろに鬢毛の改まるを照らす	月光漸照鬢毛改
日を觀んと 曾つて三神山に到り ^②	觀日曾到三神山

.....

(黄遵憲「八月十五夜太平洋舟中望月作歌」)

と書いています。すなわち、彼が見たのは想像の中の故郷であり、昔の思い出でありました。雲が深くたちこめている^{あた}辺りの下で、億万もの故郷の人家がびっしりと軒を並べていて、その一軒一軒の中には、肉親との別れを^{うら}恨む人々もいれば、歌舞にふける樓台も見えてきます。しかし、今宵は、故郷の上も私がいまいる船上も同じ秋の夜に包まれている。けれども、アメリカ大陸の西、日本より東に位置する茫漠たる海の上に、一人淋しい旅人がここにいることを、祖国の人々は恐らく誰一人とて知らないでしょう。この時、国を離れてすでに十年が経ち、彼はその間、三神山といわれる日本で日の出（御来光）を拝まんと出掛け、さらに、対岸のアメリカへ渡り、いまや、十五夜の月の光が、しらがまじりの髪を静かに照らしています。……

ここでは、明らかに、「月」は故郷と詩人、過去と現在をつなげる大切な役目を果しているように見えます。そして、静まり返った夜中に、月を仰ぎみながら、詩作に集中すればするほど、様々な想いが一度に凝聚され、益々深まってゆくのであります。

二 郷愁への誘い

月に対するこのような情感は、同時代の日本人が書いた漢詩の中にも生き生きと表現されていました。

黄遵憲のこの詩よりも二十数年も早く、江戸時代の末期に竹内使節団に随行した幕府旗本出身の文士淵辺徳蔵も異国の月を詠む詩を一首残しています。彼の書いた『欧行日記』文久2年（1862）7月14日（旧暦）の条には、帝政ロシアの首都ペテルブルクに到着した当時の様子が次のように書き記されています。

夜も何となく睡れず、つらつらおもへば、今日は孟蘭盆会の日にして本邦にては未だ秋暑も甚しき比なれども、此地は赤道より北へ六十度の地なれば夜中は綿衣を重て猶寒し。月光に見渡せば鉄橋の上には霜も置く気色なれば頻りに旅情を動かせり。

春霞立出しよりけふまでを

おもへは旅に秋の夜の月

明月秋風客愁を促し	明月秋風促客愁
独り河水に臨んで高樓に憑る	独臨河水憑高樓
鉄橋霜白くして何ぞ冷に堪えんや	鉄橋霜白何堪冷
歳晩故郷へ還ることを得ず ^③	歳晩故郷還不得

(淵辺徳藏)

さきに引用した黄遵憲の詩と較べてみても、まったくひけを取らないほど見事な情景描写であります。ここでも、漢詩の古典を巧みに援用して、視野に奥行きを与え、簡潔にして力強い表現となっています。たとえば、唐の詩人孟浩然の詩には

船を移して烟渚に泊し、	移舟泊烟渚
日、暮れて客愁新たなり。	日暮客愁新
野 眩くして、天 樹に低く、	野 天低樹
江 清くして、月 人に近し	江 清月近人

(唐・孟浩然)

という有名な一首があります。「建徳江に宿す」という題がつけられています。周知のように、孟浩然是王維と並べて称せられてきた田園詩人であり、その詩は江戸時代の文人たちにも広く愛誦されたそうであります。淵辺の詩の中にも、「客愁」や「明月」という言葉が使われており、また、高いところから辺り一面を見下している場面も非常に似ているといわなければならない。この点、自然に杜甫の名句「星垂れて平野闊く、月湧きて大江流る」をも連想させられます。ただ違うのは、淵辺はこの時、高い建物の窓からニコライ橋の下に寒々と流れるネヴァ河を眺めていることですが、漢詩自体の世界は同じであります。また、日記の中に和歌があり、漢詩も書き添えられているところは実にユニークといえましょう。

文久2年竹内使節団の旅の中で、柴田貞太郎や杉徳輔なども数多くの漢詩を

残しているが、そのどれ一つを取ってみても、唐代もしくは宋代の漢詩の世界と渾然一体に溶け込んでいることが分ります。

冒頭の説明の部分で少し触れました英語通訳系の張徳彝も清朝最初の遣外使節団に随行した際、ロンドン滞在中に、1868年の中秋節を迎え、次のような一首をものしています。

家を離れること万里にして父母を想い	離家万里念叡親
独り幽き窓に座して、涙 衿に満る	独坐幽窓涙滿巾
佳節に逢う毎 <small>ごと</small> に情 倍 <small>ますま</small> す切になれば	佳節每逢情倍切
(父母はきつと) 門に倚りて、 <small>まさ</small> 応 <small>まさ</small> に <small>まさ</small> いまだ	倚門應念未婦人
帰らぬ人を <small>おも</small> 念わん ^④	

(張徳彝)

詩のすぐ前に「黄昏月上、倚窓危座」(日が暮れて、月は上り、窓辺によりかかりて、正坐す)と記していることからして、月を仰ぎ観ながら、この詩が詠まれたことが分ります。秋口に入ってからまだ日が浅い頃の作であります。詩自体は分り易い表現を使っており、とくに優れているという訳でもないが、異国にいて、遠く離れた故郷へ想いを馳せ、孤独に耐えている姿は淵辺と同様であります。また、同じ心境を伝える漢詩として、中井櫻洲による次の一首があります。

凍雲 月を籠めて 海漫々	凍雲籠月海漫々
船は歐洲に到りて 夜 轉 <small>うた</small> た寒し	船到歐洲夜轉寒
京洛 <small>きょうらく</small> の故人 恙 <small>つつが</small> 無 <small>いな</small> きや否 <small>いな</small> や	京洛故人無恙否
尺書 汝が平安を報ぜんことを待つ ^⑤	尺書待汝報平安

(中井櫻洲「今夜月色朦朧偶懷友人」)

みなさんご存知のように、中井櫻洲こと中井弘は明治維新史に残る人物の一人であります。彼は早くも慶応2年(1866)廿九歳の時に、後藤象二郎と坂本龍馬の出資を得て、ヨーロッパへ国情探察の旅に出ました。この詩はその時に作られたものと思われます。

凍^{いて}ついた雲の中に、月がぼんやりとかすみ、海は果てしもなく広い、船はやつとのことでヨーロッパに辿りついたら、夜もふけて、寒さも次第に増してきた。祖国の京都にいる親友たちはみな無事であるであろうか。手紙が届いて、平穩無事を知らせてくれることを期待する、という内容のこの詩にも、白楽天の「三五夜中新月色、二千里外故人心」の詩句に相通ずるものが感じられます。櫻洲の尺書を待つ心にしろ、淵辺の還れざる故郷への想いにしろ、あるいは、張徳彝の父母を思う気持ちにしろ、月を見て、親しい人々を思慕するのは古今変わらぬ人情であり、三者の共通点だといえましょう。

三 表現の異同

ここまでみてきましたように、幕末から明治にかけて、日本人の海外体験を綴った漢詩は、その月を詠んだ僅かな例をみても、相当高い完成度に達しており、韻脚から字の使用に細かい注意が払われつつ、日本人ならではの表現も忘れていない。では、一体どうしてこのようになってきたのでありましょうか。また、中日両国の海を渡った人々の詩の中に、どのような違いがいえるのでありましょうか。

よくいわれているように、日本における漢詩の流行には、三つのピーク期が顕著にみられます。一つは平安時代であり、次に室町時代の五山文学があり、さらに江戸時代から明治二、三十年代までが挙げられます。とりわけ、十八世紀の七十年代以降の、いわゆる江戸後期の漢詩は、それまでの萩生徂徠、服部南郭などが尚ぶ格調高い唐詩に代って、宋詩のスタイルが珍重されるようになりました。山本北山は、詩は易しい言葉を使って、清新な意味合いを表現しなければならぬと主張し、漢詩はすでにこの時期において、百花繚乱ともいべき盛況を呈していたのであります。その背景として、まず庶民文化の興隆が挙げられますが、その他に、折衷学派や古文辞学派の学者たちが前人の成果を踏えて綿密な漢文古典についての研究を行い、かなりの学問的蓄積がありました。幕末頃になりますと、日本人の教養としての漢文知識は非常に高いレベル

に到達していたといわれています。^⑥ さらに、明治期に入ると、日本人と中国人との直接的な交流が盛んに行われるようになりました。知識人同志の会話は筆談を通じて行われ、この点は現在と較べて大きく違っています。^⑦ 当時の様子は、残された膨大な資料によって伺い知ることができます。例えば、さきにあげた張徳彝が1868年日本に立ち寄った際の記録や、明治12年（1879）王韜が来日した時、小野湖山や重野安繹しげのやすつぐなど第一流の詩人たちと交わした夥しい数の応酬詩歌^⑧ または、大河内輝声が黄遵憲をはじめとする中国人の友人との大量の筆談記録^⑨ などがあります。

このように、幕末維新期の漢詩人たちは、過去の学問上の、もしくは、教養としての漢詩文知識の伝統をうけつぎ、すでに同時代の中国の文士たちと対等に交流できるようになっていたのです。

来日した中国人文士との交流とは逆に、当時、自ら大陸へいき、交流を深めてきた日本人もいました。このような人物の中に、山口県萩出身の詩人山根立庵もいました。彼は、中学校時代に失聴したが、漢詩をこよなく愛し、興に乗じて明治中期に中国へ渡り、長期にわたって詩作によって章炳麟など当時一流の文人たちと深く交流した、と伝えられています。^⑩ 筆談のお蔭で彼は自分のハンディを感じなかったというのも大変興味深い話です。ついでに、この頃、日本人詩人による北京の秋月を詠んだ一首を紹介いたします。

倬たり彼の銀河	凝りて流れず	倬彼銀河凝不流
晩涼	水の如く身頭に濺ぐ	晩涼如水濺身頭
夜深くして何れの処よりか	横笛を吹く	夜深何處吹横笛
月は白し	金台 萬里の秋 ^⑪	月白金台萬里秋

（小田切萬寿之助「燕京秋夜」）

これは外交官であった小田切萬寿之助の作であります。とてつもなく大きな銀河（満天の星も兼ねてか）が静かに頭上に輝き、夕方の涼しさが身に迫ってくる。やがて夜が更けて、どことなく笛の音が聴こえて、月の光は金台（北京の名所、北京城の東、朝陽門の外の眺め）を白く照し出し、万里の空間も秋の

下にあります。北京の秋を詠んだ数々の詩歌の中でも、名作といえる一首であります。

世界の言語の中で、数千年の長さをくぐり抜け、今日まで生き延びた言葉は、ラテン語と漢文だけだといわれています。漢詩文は、四千年の歴史を有する巨大帝国、中国文明を支えていた文章言葉であり、二十世紀までは、中国の版図を越えて、日本、朝鮮、ベトナムを含む汎東アジア世界をひとつの文化圏に統合する言語でありました。だからこそ、太平洋上でも、ロンドンでも、ペテブルクでも、あるいは北京においても、中国人や日本人を問わず、月を観る時、心底に惹起する情感は同じであり、表現の面でも多くの共通性がみられます。

一方、幕末維新期の漢詩人たちと同時期の中国文人による詩と較べて、双方の違いも感じられます。いままでみてきましたように、淵辺や小田切の詩には、難解な表現、すなわち、中国の古典に依拠した難しい文言語彙は殆んど使われていない。故意に避けているという印象さえ受けます。日本人の詩は、どれをとってみても、非常に分り易い表現を使っており、中国の古典から言葉を借用する場合でも、学術的な誇張や抽象的な言いまわしを排除して書いています。表現の平明さは、宋詩にも相通じるところがあり、日本人の海外体験漢詩々作一般にみられる傾向であります。この問題はいままで「和習」といって中国側から軽視されてきた、日本漢詩の特徴とも複雑に絡んでいます。多くの場合、「和習」こそ従来の漢詩の「型」にはまらない、日本的な特色をよく表わし、このことは昨今ややもすれば不当に扱われてきた点だと思います。

四 月が持つ意味

終りに、もう一度、冒頭に引用した黄遵憲のあの詩の世界に戻ってゆき、併せて異国で観る月の意味を考えてみたい。

……

大千世界 此の月を共にするも	大千世界共此月
世人 中秋の節を共にはせず	世人不共中秋節

泰西の紀曆 二千年、
只だ尋常に圓欠を数えるのみ、
舟師は盤を捧げて舵樓に登り
舟は天漢と^{てんかん}同に西に流る
虬髯^{きゆうぜん}高歌して碧眼^{へきがん}酔う
異方の楽は祇だ人の愁いを増す^⑫

泰西紀曆二千年
只作尋常數圓缺
舟師捧盤登舵樓
舟与天漢同西流
虬髯高歌碧眼醉
異方樂祇增人愁

.....

世界のどこへいっても、同じ月を賞ることができますが、西洋の国々では中秋節という風習がない。二千年といわれるヨーロッパの暦では、ただ普通に月のみちかけを計算するだけである。

操縦士はコンパスを手に、操舵室に登り、舟の針路を天の河の流れに沿い西に進む。カイゼル^{カイゼル}が声高らかに歌を唱い、青い眼が酒に酔っぱらっています。なじみのない西洋音楽は、ただ心の淋しさを深めるだけであります。

ここで、黄遵憲は西洋人をちょっぴり揶揄の気持ちを込めて詠っていますが、はたして西洋では月に対する似たような情感が本当にはないのでしょうか。いずれにしても、彼はアメリカ滞在中、その前の日本在任中と較べて、とても大きな違和感を感じていたことは確かであります。耳障りで嫌気を指すのは、洋楽だけでなく、西洋での生活も彼の心の淋しさを深めたに違いありません。そして、異国で観る月は、海を渡った人たちの淋しい心を和ませ、その柔かい月の光は遙か遠くからやってきた旅人をやさしく包んでくれました。従って、月は故郷の人々の顔を映し出す鏡であり、月を詠った漢詩は東アジア文化圏に住む人々の情感を一つに結ぶ芸術的媒体ともいえましょう。

最後に、一言付け加えて終わりにしたいと思います。

私は中日両国の漢詩についてはもちろんのこと、江戸や明治初期の文学についても、また同時代の中国の文学の状況についても甚だ知識が乏しいものであります。今日は、「研究発表」というよりも、日頃読みましたこの時代の漢詩

の中から感動を与えてくれた幾首かを選び出して、感じたところを率直に述べさせてもらいました。これからの質問応答の場などで、専門家の先生たちから色々なご教示やアドバイスを頂ければ嬉しく思います。

ご静聴、ありがとうございました。

注

- ① 島田久美子注『黄遵憲』（中国詩人選集二集15、）岩波書店、昭和43年、P.76を参照。なお、引用するに当たり、訳文に若干手を加えた個処がある。以下同。
- ② 同上、P.75～76
- ③ 芳賀徹『大君の使節 幕末日本人の西欧体験』、中公新書、昭和43年、P.174～175 から引用。
- ④ 張徳彝『欧環遊記』、湖南人民出版社、1981年、P.114
- ⑤ 川口久雄編『幕末明治海外体験詩集』、昭和59年、巖南堂書店、P.57
- ⑥ 富士川英郎『鴟鵂庵詩話 江戸後期の詩人たち』、麦書房、昭和41年、P.4～6、或いは、中村真一郎『江戸漢詩』、岩波書店、1985年、P.5～15を参照。
- ⑦ 入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』研文選書、P.136～137を参照。
- ⑧ 王韜『扶桑遊記』、岳麓書社、1985年、P.380～533
- ⑨ 実藤恵秀『大河内文書』
- ⑩ 同注⑦、「第四章、異邦人として」P.117～144を参照。
- ⑪ 同注⑤ P.734
- ⑫ 同注① P.74。島田氏は読み下し文で「只だ尋常に数^{しば}は円欠けす」と訳されているが、「数」はやはり動詞と見做した方がより自然だと思います。

討議要旨

まず、小西甚一氏が阿倍仲麿の有名な望郷歌「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」を挙げられ、自らの留学体験を語りつつ平安朝以来、このテーマの詩が繰り返し詠まれ、どれほどの新意が加えられたかを検討する必要がある、と指摘された。次に、小沢正夫氏から「季語が自由な発想を邪魔していることはないだろうか。」との質問があり、発表者は「日本人は定型に縛られながらも、土地土地の風物をありのままに詠もうとしているが、一般に清末当時の中国の詩人たちは中華の意識があって、日本人が定型に縛られる以上に型（韻脚、対仗など）をモットーとし、自由な発想を妨げているように思う。」と答えられた。